



麻生 亮太郎 平成24年9月18日
先端ビーム科学センター
複合ナノ解析化学 博士後期課程2年

15th European Microscopy Congress
Poster Competition 1st PRIZE

「Quantitative Strain Analysis of BaTiO₃ Epitaxial Thin Films Using Cs-TEM and STEM-EELS」



武藤 愛 平成24年12月16日
バイオインフォマティクスセンター
化学生命科学 特定研究員

第85回日本生化学会大会 鈴木純一メモリアル賞
(優秀プレゼンテーション賞)

「大域的代謝ネットワーク中で保存された
化学反応モジュールからみる代謝パスウェイの進化」



Report

10月20(土)・21(日) 宇治キャンパス公開 公開ラボに参加して

身のまわりの高分子材料

元素科学国際研究センター 遷移金属錯体化学
修士課程1年

竹谷 知祥

毎年恒例の宇治キャンパス公開イベントが今年もやってきました。今年
は秋晴れに恵まれたおかげで参加者の出足も好調、キャンパスのあちら
こちらで楽しそうな声が聞こえていました。

我々の研究室では「身のまわりの高分子材料」というテーマを掲げ、参
加者の皆様にスーパーボールづくりを体験してもらいました。ラテックス
ゴムの溶液にクエン酸を加えるだけで、はじめは液状だったラテックス
ゴムがみるみるうちに固まり、スーパーボールになっていきます。大人から子
供まで、その様子に驚きの声をあげた後は皆一様に笑顔になっていたこ

とがとでも印象に残っています。皆さん僕達
と同じく好奇心旺盛で、鋭い質問にこちらが
思わず考えこんでしまう場面もありました。

参加者のみならず、僕達も化学の楽しさ、
奥深さを再認識できるキャンパス公開イ
ベントが僕は大好きです。来年もこのキャン
パス公開を通じて、たくさんの笑顔と出会う
ことを楽しみにしています。



▲当日の公開ラボの様子

Report

海外研究レポート

場所：フランス モンペリエ大学
期間：2012年9月2日～2012年9月26日

元素科学国際研究センター 無機先端機能化学
博士後期課程1年

平井 慧

化学研究所若手研究者国際短期派遣事業を利用し、Master in Mate-
rials Science Exploring Large Scale Facilities (MaMaSELF)のサマース
クールプログラムの参加及びモンペリエ大学Werner教授らと共同研究
を行いました。サマースクールは同年代の学生が欧州を中心に世界中か
ら集まっており、ともに講義を受け交流を深められる良い機会でした。
MaMaSELFは複数の大学にまたがって学位を取得する珍しいシステムで
す。自ら志願してこの制度に臨んだ学生らは研究者としての意識が高く、
良い刺激を受けました。共同研究においてはWerner教授らと実験結果

などについて様々な角度から検討し、
有意義な議論をすることができまし
た。「Bonjour」フランスでは人々がど
こでも気さくに挨拶を交わしてくれ
ます。また、電車に乗れば気軽にた
くさんの史跡を回ることもできま
す。人と時とが交差する町で過ご
した1ヶ月は、今後の私の研究や人
生にとって貴重な経験であったと考
えています。



▲MaMaSELF所属の学生たちと観光した時の写真。筆者は左から1人目。

事務部だより

宇治地区事務部経理課長
駒村 正章

二年を振り返って

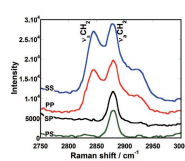
平成23年の4月から宇治地区事務部にお世話になり約2年が経ちました。就
任当初、時任前所長にご挨拶伺った際に最初に言われたことは、「宇治地区
共通経費を何とかして下さい」でした。簡単に言うと、宇治地区共通経費の決
算額の確定が年度末になることにより、各研究所等の決算に多大な支障を
きたしているの、もっと効率的に予算執行が出来るよう考えて欲しいとの事
でした。これが私が最初にいただいた大きな課題でした。

これは宇治地区全体の課題でもあり、また、業務の効率化等の課題も併せて
解決する必要があるため、私は就任後すぐに経理課、研究協力課、施設環境課
の主任以下の若手で構成する「宇治地区決算方針検討プロジェクトチーム」を
設置しました。このプロジェクトチームでは予算執行管理の在り方に係る問題
点を洗い出して、その改善策を打ち出すことにより、宇治地区共通経費の早期
確定及び各研究所の効率的な予算執行等を促して、早期決算を実現するた
めの方策を検討してまいりました。その改善策等については昨年度11月の「宇
治地区部局長会議」でご承認いただき、今年度、各研究所等のご協力の下、本
格的な取り組みを実施しているところでございます。

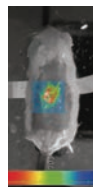
一方、新たな大きな課題として、国の厳しい財政状況等を受け、今年度給与
削減が実施され、平成25年度学内配分の見直しが行われている中、来年度以
降の各研究所の財政状況が非常に厳しくなる事が予想され、事務部を含め、
今まで以上に業務の効率化や経費の削減等に取り組まなければならないと考
えております。

このような厳しい状況下ではありますが、化学研究所の研究教育活動をより一
層に発展させ、効率的な部局運営が図れるよう、事務部といたしまして、最大
限支援させていただきますので、今後ともご協力よろしくお願いたします。

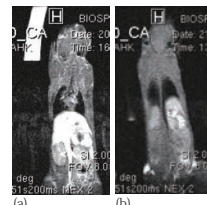
表紙図について



↑ガラス基板上に作製した
ステアリン酸ドミウム5層
Langmuir-Blodgett膜の非共
鳴偏光ラマンスペクトル。詳
細はP6。



↑ゼラチンでくんだ酸化ガドリニ
ウムナノ粒子をマウスに皮
下注射した後の光音
響画像。詳細はP7。



↑ゼラチンでくんだ酸化ガドリニ
ウムナノ粒子をマウスに静脈注
射した5分後(a)、24時間後(b)の核磁
気共鳴画像。詳細はP7。

編集 後記

本館の耐震改修により一時中断してい
た「化研らしい融合的・開拓的研究」が復
活し、本号巻頭では採択された若手研究者
のプロジェクトに対する熱い思いが特集さ
れています。今年度より外国人枠が設けら
れ、化学という共通言語をもとに異分野のスペシャリストのアイ
デアがまさに化学反応し、国籍を越え、分野を越えた有機的な
連携研究が展開されようとしています。化研の自由な研究環境
の下、共同利用・共同研究拠点事業も含め新たな研究が活発
化していくことが期待されます。最後に、本号の出版にご協力い
ただきました皆様に厚く御礼申し上げます。

(文責：肥塚 崇男)

編集委員

広報委員会黄旗担当編集委員 長谷川 健、島川 祐一、増淵 雄一、肥塚 崇男
化学研究所担当事務室 吉谷 直樹、宮本 真理子、高橋 知世
化学研究所広報室 濱岡 芽里、谷村 道子、中野 友佳子、井上 純子